

近世後期における大津・福井の金相場

——大阪との比較において——

草 野 正 裕

はじめに

I 大津金相場

II 福井金相場

おわりに

はじめに

繰り返し述べたように⁽¹⁾、近世物価史研究とりわけ近世における物価の地域差を論じる場合には、われわれは、三貨および札相互の交換比率（金銀銭相場および札価）の変動とその地域差の問題を、困難ではあるが正確に把握する必要がある。また、貨幣史研究の場合にも、金銀銭相場および札価の問題は、貨幣改鑄との関係も深く、重要な問題であることは疑いを入れない。

これまでこの方面の研究は、江戸、大阪の金（銀）相場等の研究が中心で⁽²⁾、地方の貨幣相場あるいはその地域差の問題は、資料の制約もあって論じられることは少なかった。われわれは、中央市場だけではなく、分析検討の範囲

(1) 筆者はこれまで金相場の動向について、つぎの三稿をおおやけにしている。拙稿「近世後期における三都の金（銀）相場」『甲南経済学論集』44巻2号（2003年）、同「江戸末期（文政～幕末期）における土佐・徳島・姫路の金相場——大阪との比較において——」『甲南経済学論集』44巻4号（2004年）、同「幕末期における西摂・北摂池田の金相場——大阪との比較において——」『甲南経済学論集』46巻1号（2005年）。

(2) たとえば、新保博『近世の物価と経済発展——前工業化社会への数量的接近——』（東洋経済新報社、1978年）、4章。

を広げ、できる限り地方の貨幣相場についても取り上げて行きたいと思う。

その意味で、われわれはこれまでに、近世後期における三都、土佐・徳島⁽³⁾・姫路、西撰・北撰池田の金相場の動向を検討してきた。

本稿では引き続き、大阪との比較において、近世後期における大津（Ⅰ節）、福井（Ⅱ節）の金相場について分析検討することとしたい。大津は天領（幕府の直轄都市）で、藩札の発行および流通を欠いていたのに対し、福井は、幕末にかけて大量の藩札を濫発し続けたという点が特徴的である。

I 大津金相場

本節では、まずはじめに、大津金相場（金1両につき銀匁）の変動を大阪金相場のそれとの対比において分析検討することとしたい。

大津金相場は、鶴岡美枝子氏が「近世米穀取引市場としての大津」⁽⁶⁾という論文において、付表として掲げられた「自宝暦五年至安政六年大津穀類其他相場表」のうち「金（売）1両二付銀匁」の系列をもちいている。

この系列によると、ほとんどの場合、各年について月毎の金相場を知ることができるが、ここではこれらを適宜平均して、最終的には各年に一つの金相場というふうにとまめることとした。この結果、たとえば1755（宝暦5）

(3) 前掲拙稿「近世後期における三都の金（銀）相場」。

(4) 前掲拙稿「江戸末期（文政～幕末期）における土佐・徳島・姫路の金相場」。

(5) 前掲拙稿「幕末期における西撰・北撰池田の金相場」。

(6) 鶴岡美枝子「近世米穀取引市場としての大津——近江湖東農村商人の相場帳の紹介（二）——」『史料館研究紀要』5号（1972年）。原史料は、近江国蒲生郡鏡村の米商人が遺した玉尾家文書（国立史料館蔵）のうち、宝暦～安政年間の「万相場日記」である。この史料をもちいた研究としては、岩橋勝『近世日本物価史の研究——近世米価の構造と変動——』（大原新生社，1981年），第3部第6章がある。同書巻末に付表2として、氏作成の「近江仁正寺藩八幡弘米価格」が掲げられており、その中に両替相場（金1両につき銀匁）の記載がある。ただし、年平均相場ではなく、おおむね年末の相場である。

(7) 月によっては金相場がある幅をもって示されていることがあり、その場合はその最高値と最低値の平均をこの月の金相場とみなした。

近世後期における大津・福井の金相場

年の大津金相場は、金1両につき銀59.55匁というように表示される。なお、月毎の金相場には、「日付」、「出」、「出し」、「売」、「正出し」、「買」、「うり」、「正味」、のような語ないしは注記が付けられている場合がかなりある。しかし、今回の加工処理においてこの点を反映することはできなかった。また、1845（弘化2）年の月毎金相場の一部について、原史料鼠害のため判読不能の部分があるという。

つぎに、大阪金相場の系列は、これまでの一連の拙稿論文と同様、新保博氏⁽⁸⁾が整理作成されたもの⁽⁹⁾をもちいている。

図1は、大津金相場の系列を図示したものである。図1下段には、大阪金相場の各年値がグラフ化されている（金1両につき銀匁、半対数目盛）。中段には、大津金相場（金1両につき銀匁、半対数目盛）が描き込まれている。最後に上段には、大津金相場／大阪金相場比（単位1、普通目盛）がグラフ化されている。

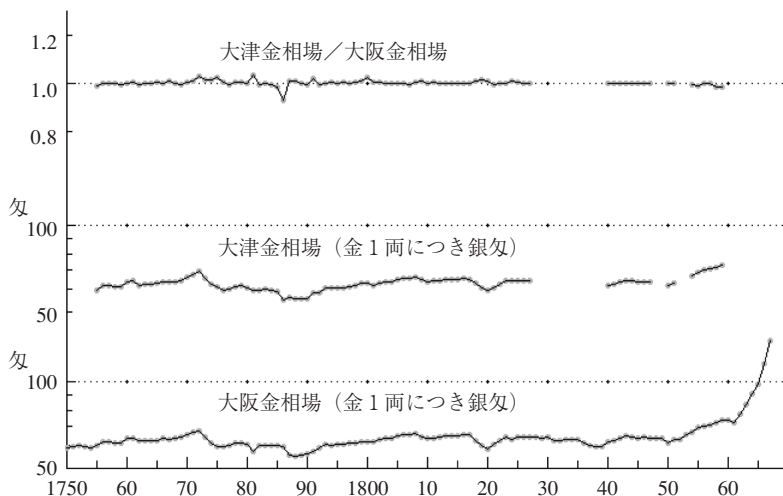
さて、図1の観察に移ると、まず、欠年を別とすれば大津金相場と大阪金相場は、趨勢的にはほぼ同じように動いたと見てよいであろう。グラフには示されていないが、大津と大阪両地金相場の5ヵ年移動平均の系列を見ると、大津と大阪で峰および谷はだいたい一致している。この峰および谷の一致は、京都と大阪、姫路と大阪の場合にも見られるが、これら三者に較べると江戸と大阪、徳島と大阪の場合は一致の度合は小さいようである。

上段の大津金相場／大阪金相場比の動向を見ても、やはり両地金相場の動きは、ほぼ平行であった。しかし、1780年代は両地の動きは多少異なったものとなっている。

(8) 前掲拙稿「近世後期における三都の金（銀）相場」、同「江戸末期（文政～幕末期）における土佐・徳島・姫路の金相場」、同「幕末期における西撰・北撰池田の金相場」。

(9) 前掲新保『近世の物価と経済発展』、30～37、171～176ページ。なお、原資料は『大阪金銀米銭并為替日々相場表』など。

図1 大津金相場（対大阪金相場）



もう一つ目につくのは、大津／大阪比に見られるように、大津金相場の水準は大阪のそれに較べてやや高かったということである。図には描き込まれていないが、稿末付表に掲げた5カ年移動平均の系列を見ると、この点はいっそう明らかとなる。地方金相場が大阪のそれに較べて高かったという現象は、土佐、徳島、姫路、北摂池田、福井（次節）などでも見られたし、江戸の場合も大阪より少し高かった。

また、大津金相場／大阪金相場比は、1850年代になると下降の傾向で、大津に較べ大阪の方が銀安が進んだことがわかる。この点は、江戸、京都、徳島、福井の場合も同様の傾向が見られたが、土佐、姫路、西摂、北摂池田の場合は異なった。なお、大津金相場の1860年代のデータが利用できないのは残念というほかはない。

*

大津金相場の動向は、他の地方金相場に較べると、もっとも三都の金相場の動向に近かったようである。大津金相場の水準は大阪のそれよりも少し高

近世後期における大津・福井の金相場

かったが、土佐、徳島、姫路、北摂池田、福井（次節）などと較べればそれほど高いわけでもなかった。また、1850年代になると、大津金相場／大阪金相場比は下降の傾向であったが、江戸／大阪比、京都／大阪比の場合も同様であった。このように、大津金相場の動きが三都金相場のそれと似通っていたのは、いかなる理由によるのであろうか。

言うまでもなく三都（京都、江戸、大阪）は、天領（幕府の直轄都市）で、大津もまた天領であった。天領においては例外がないわけではなかったが、一般に藩札が発行されたり使用されたりと言うことはなかった。大津の場合も同様で、たとえば『大津市志』⁽¹⁰⁾、『滋賀縣史』⁽¹¹⁾、『滋賀県の歴史』⁽¹²⁾、『藩史大事典』⁽¹³⁾、『新修大津市史』⁽¹⁴⁾などに拠っても、大津における藩札についての記述はまったく見られない。このように、三都および大津において、いずれも藩札の発行および流通を欠いていたことが、大津金相場の動きと三都金相場のそれとを似通わせることとなった主たる要因であると思われる。

ちなみに大津における代官支配について、『大津市志』を参照しながら⁽¹⁵⁾、かんたんに経緯を述べるとつぎのようになる。まず、徳川氏は、1617（元和3）年にはじめて大津代官所を置いた。組同心18名を配置し、幕府直轄の地と定めて、伝馬所を置き人馬の継ぎ立てを担当させた。小野總左衛門が代官に命ぜられ、ついで1650（慶安3）年に小野喜左衛門、1672（寛文12）年に小野半之助、1699（元禄12）年に雨宮庄九郎、1711（正徳元）年に雨宮源次郎などが相次いで職を襲った。そして1713（正徳3）年に、雨宮氏に代わっ

(10) 大津市私立教育會『大津市志』上巻（淳風房、1911年）。

(11) 滋賀縣『滋賀縣史』三巻（三秀舎、1928年）。

(12) 原田敏丸・渡辺守順『滋賀県の歴史』（山川出版社、1972年）。

(13) 木村礎・藤野保・村上直編『藩史大事典』5巻近畿編（雄山閣、1989年）。

(14) 林家辰三郎・飛鳥井雅道・森谷尅久編『新修大津市史』3巻近世前期（大津市役所、1980年）、林家辰三郎・飛鳥井雅道・森谷尅久編『新修大津市史』4巻近世後期（大津市役所、1981年）。

(15) 前掲『大津市志』上巻、103～4ページ。

て古郡文右衛門が襲職した。この間、大津市街の賑わいは年をおって増大した。1719（享保4）年の調査によると、人家は5,142戸、人口17,481人、僧163人、山伏8人、神社14、寺院66を数えるようになったという。

ところが1722（享保7）年、大津代官が廃止されることとなり、以後京都町奉行の支配下に入った。しかし幕府は、1771（明和8）年再び代官を置くこととし、石原清左衛門が職に就いた。その子孫が数世相次いで襲職した。1843（天保14）年石原氏に代わって都築金三郎が代官職に就き、大いに宿弊を矯正し、町治を整理し、市民は前途に望みを抱いたという。1848（嘉永元）年（あるいは2年ともいう）に多羅尾久右衛門が代官職を兼治したが、1849（嘉永2）年に石原清左衛門の再任するところとなり、1855（安政2）年には石原清一郎がこれを継いだ。しかし明治維新となって、大津代官所は廃止され大津裁判所に所属することになった。

*

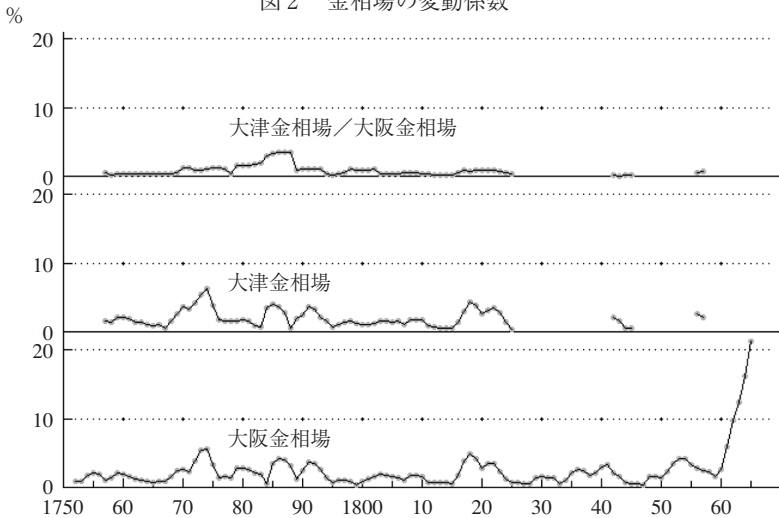
次に、大津金相場の変動の激しさを、大阪金相場のそれとの対比で検討することとしたい。図2の変動係数のグラフは、この目的のために作成したものである。下段には大阪金相場、中段には大津金相場、上段には大津金相場／大阪金相場のそれぞれ5年期ごとの変動係数が図示されている。

変動係数は、いくつかの変量について、標準偏差が平均の何%にあたるかというかたちで定式化される。グラフ化に際しては、1755年から1759年の5年間の変動係数を、その中央年である1757年にドットするというふうに、いわば「5ヵ年移動変動係数」とでも呼べるようなかたちで処理されている。本論文で変動係数をもちいたのは、このタームをたんに変動の激しさを表わす目安にしようというにすぎない。変動係数をもちいることによって、両地金相場、大津／大阪比の系列が、実際にどの程度の幅で変動していたか、あるいは変動しなかったかが明らかとなる。⁽¹⁶⁾

さて、図2の観察に移ると、（グラフから読みとるのはやや難しいが）ど

近世後期における大津・福井の金相場

図2 金相場の変動係数



の時期に変動が激しくどの時期に変動が小さいかといった変動のパターンは、大津と大阪であまり変わらないと言える。ただし、1780年代は、大津の方が時間的に先に変動が激しくなるといった傾向が観察される。したがって大津／大阪比の変動係数も1780年代には大きくなっている。これらのことは江戸と大阪の場合にも観察された。

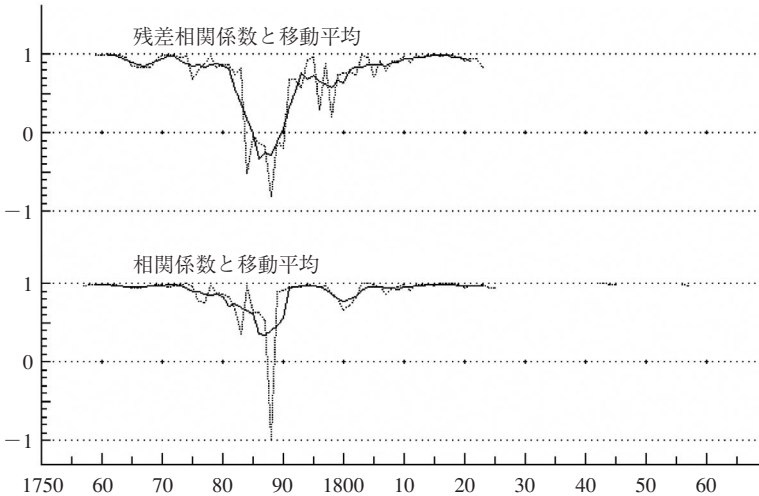
しかし大津が変動のパターンという点で大阪と似ているのは、江戸と大阪の場合の類似以上であった。この点は大津と大阪が地理的に近かったということが影響していると考えられよう。

*

次に、図3は、大津金相場と大阪金相場の相関係数をグラフ化したものである。下段点線はいわば「5ヵ年移動単純相関係数」とでも呼ぶべきもので、グラフ化にさいしては、たとえば、1755年から1759年の5年間の相関係数を、

(16) 以上の統計操作については、拙著『近世の市場経済と地域差——物価史からの接近——』（京都大学学術出版会、1996年）、21～22ページ。

図3 大津金相場と大阪金相場の相関係数



その中央年である1757年にドットするというふうな処理を、繰り返し行なっている。また上段点線は「5カ年移動残差相関係数」とも呼ぶべきものである。

残差相関係数の計算過程はつぎの通りである。すなわち系列のそれぞれについて、まず、各年値マイナス5カ年移動平均値（すなわち残差）を算出し、しかるのち、これら残差系列間で相関をとっている。グラフ化にさいしては、たとえば、1757年から1761年の5年間の残差相関係数を、その中央年である1759年にドットするというふうな処理を、繰り返し行なっている。

はじめの単純相関係数をもちいると、それぞれの系列がともに上昇趨勢、あるいは下降趨勢にあるような場合、短期的な相関を見だしにくいというようなことがありえよう。そこで、後者の残差相関係数をもちいることにすれば、原系列の趨勢に左右されない短期的な相関を見きわめることが可能になると考えられる。

下段上段いずれの場合も実線は、平滑化の目的で、「5カ年移動相関係数」

近世後期における大津・福井の金相場

のさらに5ヵ年移動平均をとったものをあらわしている。⁽¹⁷⁾

さて、大津金相場と大阪金相場の相関について観察することとしよう。この場合、いま述べたように、原系列の趨勢に左右されない短期的な相関を見きわめたいという理由から、残差相関を中心にみていくこととしたい。

残差相関によると、大津と大阪の金相場には強い正の相関が観察される。すなわち1760年代、70年代で0.8以上、19世紀に入ると、0.8～0.9、10年代は0.9～1.0という大きな相関係数となっている。このような大津金相場と大阪金相場との大きな相関には、大津および大阪がいずれも天領（幕府の直轄都市）で、藩札の発行および流通を欠いていたということが、大きく影響したと思われる。

しかし、1780年代と90年代は正の相関がくずれて無相関あるいは逆相関の傾向さえ観察される（この点は、江戸と大阪の場合にも観察された）。先に見たように、1780年代は大津と大阪で、金相場の動きは多少異なったものとなっていた。また、変動係数の分析によっても、1780年代は大津金相場の方が時間的に先に変動が激しくなるという傾向が観察された。このような事情が、大津と大阪で、1780年代と90年代は正の相関がくずれて無相関あるいは逆相関の傾向さえ観察されるという事実反映したと考えられよう。

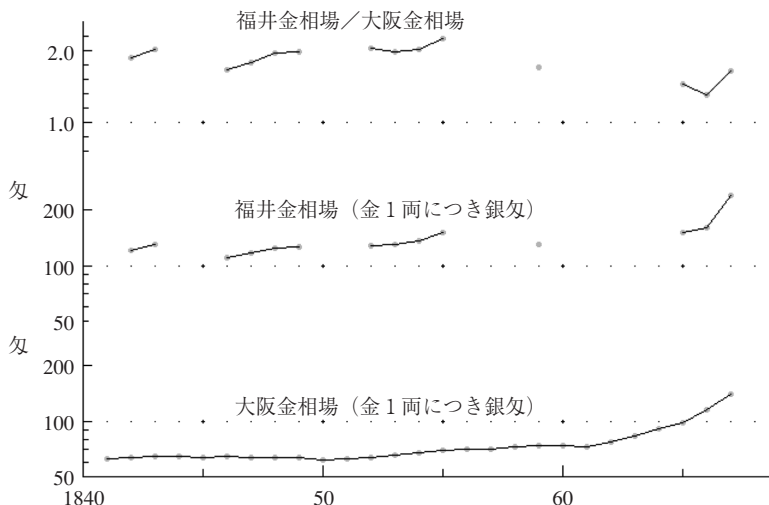
観察の対象とした期間について比較可能な系列は、江戸金相場と大阪金相場の相関であるが、これは大津と大阪に比べると相関の度合いはやや小さいようである。この点は、大津と大阪の場合に比べて、江戸と大阪の場合は地理的に大きく離れていたということが影響したと思われる。

II 福井金相場

最後に、福井金相場の動きについて大阪との対比において検討することと

(17) 以上の統計操作については、前掲拙著『近世の市場経済と地域差』、43～44ページ。

図4 福井金相場（対大阪金相場）



(18)
したい。

福井金相場の系列は、「福井藩禄高中諸給人惣額公私諸費惣額区別調」⁽¹⁹⁾と題された文書から得たものである。史料「福井藩禄高中諸給人惣額公私諸費惣額区別調」には、相当数の欠年を含んではいるが、天保（1830～43年）末から明治初年にかけて、若干の福井金相場データが記載されている。年によっては金相場がある幅をもって示されているので、この場合にはその最高値と最低値の平均をこの年の金相場とみなすこととした。

(18) 筆者は以前、前掲拙著『近世の市場経済と地域差』、8章において、大阪金相場との比較で、福井金相場にかんする若干の分析を行なったことがある。本節は、その際の分析を敷衍したものである。

(19) 「福井藩禄高中諸給人惣額公私諸費惣額区別調」（松平文庫，福井県立図書館蔵）。この史料は「松平文庫」に収められてはいるが、史料の性格は定かではなく、おそらくは明治にはいつてから松平家ゆかりの人が、なんらかの原史料から抽出して覚書としたものようである。

近世後期における大津・福井の金相場

つぎに、大阪金相場の系列は、前節同様、新保博氏が整理作成されたもの⁽²⁰⁾をもちいている。

図4は、福井金相場の系列を図示したものである。図4下段には、大阪金相場の各年値がグラフ化されている（金1両につき銀匁、半対数目盛）。中段には、福井金相場（金1両につき銀匁、半対数目盛）が描き込まれている。最後に上段には、福井金相場／大阪金相場比（単位1、普通目盛）がグラフ化されている。

図4に拠れば、福井金相場の系列に相当数の欠年があり、観察には慎重を要するものの、おおむね次のようにいってさしつかえないであろう。すなわち、1840年代以降幕末にいたるまで、福井金相場と大阪金相場は、趨勢的にはほぼ同じように推移した。

ところが、福井／大阪比の系列をみると、以下に述べる二つの事実が明らかとなる。一つは、この期を通じて、福井金相場の水準は、大阪金相場のそれに比べてはるかに高かったということである。たとえば、1855（安政2）年に福井／大阪比は2.16という高い値（最大値）を示しているが、これは、福井金相場が大阪金相場の実に116%増しであったことを意味している。また、1866（慶応2）年になると、この比は小さくなったが（1.38、最小値）、それでも38%増しであった。このように、地方の金相場が大阪金相場の2倍以上にもなっているのは、これまでに扱った地方の金相場のなかでは、他に例をみない高い水準である。

もう一つの事実は、福井金相場／大阪金相場の比率が、1850年代をピークとして、以後低下することである。すなわち、福井の銀安金高傾向は、依然として大阪の銀安金高傾向を上回ってはいるものの、1860年代になると急激に大阪の銀安金高傾向が進んだことが観察される。このように、福井金相場

(20) 前掲新保『近世の物価と経済発展』、30～37、171～176ページ。なお、原資料は『大阪金銀米銭并為替日々相場表』など。

／大阪金相場の比率が、1850年代にやや低下、60年代に急速な低下とみることができるとすれば、これは、すでに見た江戸金相場／大阪金相場、京都金相場／大阪金相場、徳島金相場／大阪金相場、および大津金相場／大阪金相場の比率の推移と（比率の水準はともかく）、ほぼ同じような傾向であると言ってよいであろう。

さて、天保期（1830～43年）以降、福井金相場は大阪金相場の2倍にもなっていた。したがって、当然のことながら、福井の金相場は正銀に対するものではなくて、札建てすなわち藩札表示の相場ではなかったかという推測が成り立ち得よう。⁽²¹⁾そこで、この札建ての問題を考えるために、以下、福井藩における藩札の発行および流通について、前稿同様、⁽²²⁾主として、『図録日本の貨幣5』⁽²³⁾を参照しながら、簡単に検討することとしたい。

*

1661（寛文元）年8月、財政不足に苦しんだ福井藩は藩札を発行した。あまねく知られているように、これがわが国藩札の嚆矢である。このとき城下の荒木七郎右衛門、駒屋善右衛門の宅を札所とし、札元の兩名を元締とし、これに補助者8名を任命して引替を担当させた。三国、金津、粟田部、府中の4カ所に札所分所をおいた。発行高と種類は不明であるが、十匁札が最高であったらしい。

この寛文の藩札は、その後延宝、天和のころまで引き続き発行されていた。しかるに、1687（貞享4）年にこれを廃止することに決し、札銀100匁につ

(21) 金相場ではなくて米価についてであるが、山崎隆三氏は、福井米価は藩札建てであった可能性が大きいと指摘している。山崎隆三『近世物価史研究』（塙書房、1983年）、214～215ページ、224ページ。

(22) 前掲拙稿「幕末期における西撰・北撰池田の金相場」。

(23) 土屋喬雄・山口和雄監修 日本銀行調査局編『図録日本の貨幣5 近世信用貨幣の発達（1）』（東洋経済新報社、1974年）、254～258ページの福井藩の部分。なお、この部分は主に『福井県史』第二冊第二編、『稿本福井市史』上巻を参照しているという。

近世後期における大津・福井の金相場

き小判1両の割合で正金と引き替えることとした。当時の総発行高939貫800匁（1両＝100匁として9,398両）のうち廃棄に付した額は479貫261匁、蔵納高は320貫目、差引140貫539匁が正金1,405両1分余に交換されたという。

ところで、ここに言う総発行高939貫800匁という額は、福井藩の財政規模に対して、どれくらいのウエイトを占めていたであろうか。かなり時代は下るが、1802（享和2）年のデータ⁽²⁴⁾によると、福井藩の歳入は3万2,704両、歳出は4万6,774両で、差引不足は1万4,070両であったと言うから、銀札は財政赤字分に近い額が発行されていたと考えることもできよう。

もう一つ注目しておきたいのは、札銀100匁につき小判1両の割合で正金と引き替えたという点である。金1両＝銀60匁という交換率からすると、早くも藩札価値の大幅な下落が生じていて、銀安全高の交換率であったことがわかる。

福井藩は、1702（元禄15）年6月、幕府に対して二度目の札遣い申請を行ない、その許可を得て10月から札遣いを実施した。このとき、札元を金屋弥助、札所を荒木、駒屋とし、10月15日から向こう1ヵ月間に正貨を銀札と交換させた。

そしてこの措置実施ののちは、領内での金銀遣いは禁止され、銭遣いについても1匁相当額を限度とし、それ以上は札遣いとした。さらに他国商人が領内で商取引を行なう場合には、銀札の使用を強制し、また上納銀もすべて銀札をもって収納させることとした。しかし藩は、5年後の1707（宝永4）年、幕府禁令に従い銀札の発行を停止することとなった。

1730（享保15）年6月、藩札解禁にともない、福井藩でも幕府の許可を得て、同年11月1日から藩札の発行を再開した。通用期間は25ヵ年で、元締はやはり荒木、駒屋両家であった。そして翌12月6日より藩士たちに対し、身

(24) 印牧邦雄『福井県の歴史』（山川出版社、1973年）、173～174ページ。なお、原資料は、「享和二戌年御本払御積帳」（村田氏寿編「会計の部」所収、松平文庫）。

分により一定の額を定めて藩札を貸与し、10年賦で返済させることとした。これを享保の御貸札といった。

当時の発行高は明らかではないが、1740（元文5）年7月には5,000貫目の銀札を発行して旧札と交換し、また1742（寛保2）年8月にはさらに3,500貫目の銀札を発行したとされる。この3,500貫目の内訳は次のとおりである。

十匁札	2,300貫目（23万枚）
五匁札	500貫目（10万枚）
四匁札	80貫目（2万枚）
三匁札	210貫目（7万枚）
二匁札	230貫目（11万5,000枚）
一匁札	120貫目（12万枚）
五分札	60貫目（12万枚）

当時、札元の手元には引替準備金が欠乏し、交換をしばしば差し止めたこともあったので、農民は銀札を嫌い、ひそかに金銀を使用した。藩は再三警告を出す一方、1758（宝暦8）年11月には大阪の蔵元牧村某を札元に委嘱し、その信用力によって金銀遣いを抑えようとした。また1760（宝暦10）年5月には、領内から新規に町人や農民の富裕者18名を選んで元締とし、金2万両を準備して銀札の引替に当たらせた。それにもかかわらず、藩札の流通は依然として円滑を欠き、藩当局は1768（明和5）年4月、城下の富商15名に元締の加勢を命じた。

その後も福井藩は、1772（安永元）年、1777（安永6）年、1782（天明2）年、1787（天明7）年、1792（寛政4）年、1797（寛政9）年、1802（享和2）年、1807（文化4）年、1812（文化9）年、1817（文化14）年と藩札を発行している。ちょうど5年置きに50年間にわたって藩札が発行されたことになる。

近世後期における大津・福井の金相場

ついで1821（文政4）年10月には、藩はさらに幕府に対し爾後25カ年の通用を出願して銀札発行の許可を得た。同月幕府に届け出た銀札発行高は次のとおりである。

銀札高	2,000貫目		
うち	1,000貫目	十匁札	10万枚
	300貫目	五匁札	6万枚
	10貫目	四匁札	2,500枚
	180貫目	三匁札	6万枚
	200貫目	二匁札	10万枚
	200貫目	一匁札	20万枚
	110貫目	五分札	22万枚

なお、福井藩札独特の呼称に、大目札、中目札、小目札という呼び方がある。大目札とは銀10匁以上、中目札とは5匁～1匁、小目札とは五分以下のものを言う。大目札は初発時から安政までは10匁が最高であったが、1860（万延元）年には、30匁、20匁が、ついで1861（文久元）年には、50匁、30匁、20匁が、さらに、1864（元治元）年と1865（慶応元）年には100匁の札が出ている。

天保年間（1830～43年）にいたると、福井藩の藩札流通はかなり盛んとなり、加賀や近江との境界あたりまで流通した。また、福井藩隣藩の勝山藩においても大量の藩札が発行されており、19世紀以降になると、藩内における通用は、ほぼ藩札をもちいて行なわれた。しかも藩財政の不安定を反映していたのか、一般に勝山藩札は福井藩札の約半分の価値しかなく、また勝山米は福井米より高値であったという⁽²⁵⁾。したがって、一般に勝山藩内でも福井藩札が通用し、かつ両藩札のあいだには交換のための相場が形成されていたと

(25) 勝山市『勝山市史』1巻（1974年）、966～968ページ、975～976ページ。勝山市教育委員会編『勝山の歴史』（1970年）、154～155ページ、233ページ。

推測されよう。

このように福井藩の藩札は盛んに流通したが、他面、正金との兌換も増大したため、1833（天保4）年6月には、元締に命じて1ヵ年およそ5万両の資金を補充させた。しかし藩札の増大に対して準備銀は不足がちで、かつ、1836（天保7）、37（同8）年には凶荒となり、米価は高騰した。⁽²⁶⁾かくて藩札の相場ははなはだしく下落、引替希望者が続出し、なかんずく天領であった本保領⁽²⁷⁾の住民からの引替要求が強かったため、福井藩は幕府からしばしば警告を受けた。天領において、藩札の発行および流通は認められなかったからである。

そこで同藩当局は、1843（天保14）年9月、札所趣法書を発布し、それにもとづいて新札を発行し、旧札を整理した。『福井県史』には、「……藩主松平慶永入部に際し、（天保）十四年閏九月札所趣法書を出して整理に決し、弘化三年十二月に至りて、引換相場金一両宛百三匁換を六十五匁換に恢復したりき⁽²⁸⁾」とある。すなわち、整理の結果、1846（弘化3）年12月にいたって、従来引替相場金1両＝札銀103匁であったのを、65匁にまで回復することができ、藩札の流通も好転したという。しかしのちに述べるように、この点は疑わしいようである。

恒常的赤字経済に悩み続けてきた福井藩に、財政立ち直りのきっかけをあたえたのは、1858（安政5）年10月、藩士三岡八郎（由利公正）の建議によ

(26) 福井米価の検討については、前掲拙著『近世の市場経済と地域差』、7、8章。

(27) 越前国内の11万石におよぶ幕府領は、時代により多少の相違はあるが、一般には飛騨郡代が兼ねる本保代官支配地域と、福井藩預りの御預所支配地域（幕府領の約6割）に分割統治されていた。飛騨高山に駐在する飛騨郡代は、越前国内の所管地域（4～6万石）を支配するために、丹生郡本保村（現越前市本保町）に代官陣屋を設け、常駐の元締以下の手代4、5名に事務を処理させていた。また、手代は陣屋所在地の有力農民を割元^{わりもと}に任じ、その職務を補佐させていた。そして代官自身は、秋の収穫時に管下郡村を廻村するために赴任してくるのが慣例であった。前掲印牧『福井県の歴史』、131～132ページ。

(28) 福井県『福井県史』第2冊（1921年）、234ページ。

近世後期における大津・福井の金相場

る産業振興計画であった。すなわち藩はその一環として5万両の製造方切手（藩札）を発行し、これを殖産資金として生産者に貸し付け、藩の専売制下におかれた国産品、とくに生糸^{からむし}その他繊維品（木綿、苧、麻等）や茶、醤油、藁工品等を領外、さらに外国にまで輸出して正貨を獲得することを計画した。その主眼とするところは、民富を基礎とする藩財政の強化であり、三岡はこの富国策の理論的根拠を師横井小楠から得たとと言われる。

三岡は市中や農村の有力者たちを歴訪してかれらを説得し、その協力のもとに、1859（安政6）年10月、物産総会所を設立した。総会所は藩札元締駒屋方に開設され、領内生産増強のための貸付資金として切手（藩札）5万両が発行された。会所の元締には、物産に関係があり、かつ信用のある問屋商人をあてた。領内産物の集荷、売り捌きなど実際の取扱いは、ほとんど会所関係者の自由裁量にゆだねられ、藩からは1名の吟味役が会計の監査にあたるだけであった。この総会所による生産資金の貸付は、町や在方の商品生産を大いに刺激した。1861（文久元）年には総会所を通じて各地に輸出された物産の総額は300万両に達し、藩札は漸次正貨に変わり、藩庫には常時50万両内外の正貨が貯蔵されるまでに藩財政は立ち直ったという⁽²⁹⁾。

広く知られているように、のちに由利公正が明治新政府の財政担当者として、殖産興業による富国策を実現するために、会計局の商法会所の貸付を通じ太政官札を発行したのは、先の福井藩における経験を全国的に応用したものである。その意味で福井藩での富国策が、藩権力と商人との密接な結合依存関係のもとに推進されたことは、とりもなおさず維新後政府の藩閥権力と商人資本との結合のもとに展開された殖産興業政策の原型をなすものであったと行うことができよう。

(29) もっともこのような殖産興業政策で、従来の膨大な藩債を一挙に整理し、黒字財政に転換したとみるのは、はなはだ問題であろう。前掲印牧『福井県の歴史』、189ページ。

1868（明治元）年9月、札所奉行の名称を御国財元締役楮幣製作方取締と改めた。前掲『図録日本の貨幣5』（原資料は大蔵省編「各藩々札取調書（明治元～四年）」）によれば、明治初年の福井藩銀札流通高はつぎのとおりであるという。

百目札	1,476,726枚	147,672貫600匁
五十目札	180,061枚	9,003貫050匁
二十目札	1,029,313枚	20,586貫260匁
十匁札	1,396,139枚	13,961貫390匁
五匁札	242,745枚	1,213貫725匁
三匁札	175,461枚	526貫383匁
二匁札	219,596枚	439貫192匁
一匁札	230,235枚	230貫235匁
五分札	199,930枚	99貫965匁
		計 193,732貫800匁
		(605,415両) ⁽³⁰⁾

また同藩は維新前後、銭札を発行した。その高はつぎのとおりである。

五貫文札	120,000枚	600,000貫000文
二貫文札	300,000	600,000貫000文
一貫文札	623,794	623,794貫000文
五百文札	759,761	379,880貫500文
三百文札	302,488	90,746貫400文
二百文札	201,078	40,215貫600文
百文札	200,066	20,006貫600文
五十文札	320,864	16,043貫200文

(30) 1両=320匁で換算されている。

近世後期における大津・福井の金相場

二十文札 105,365 2,107貫300文
計 2,372,793貫600文⁽³¹⁾
(247,166両)

江戸時代後期に比して、流通高が著増している点がとくに注目される。1871（明治4）年、廃藩置県とともに、福井藩札も新貨と引き替えられたが、そのときの交換比率は金一両につき銀貨330匁、銭貨10貫文とされた。⁽³²⁾

*

さて、先に観察したように、1840年代以降幕末にいたるまで、福井金相場の水準は、大阪金相場のそれに比べてはるかに高かった。場合によっては、大阪金相場の2倍以上にもなっていたのである。これまでに扱った地方の金相場のなかでは、他に例をみない高い水準である。したがって、当然のことながら、福井の金相場は正銀に対するものではなくて、札建てすなわち藩札表示の相場ではなかったかという推測が成り立つ。

この札建ての問題を考えるために、福井藩における藩札の発行および流通について検討してきたのであるが、やはり、福井の金相場は札建てすなわち藩札表示の相場であることは、ほぼ間違いがないと思われる。

たとえば、福井藩は、早くも1687（貞享4）年、寛文藩札廃止にあたって、小判1両につき札銀100匁の割合で正金と引き替えている。また、藩は1843（天保14）年に紙幣整理を行ない、その結果、それまで金1両＝札銀103匁であった引替相場を、65匁にまで回復することができたとする記録も残されている。もっとも、史料「福井藩禄高中諸給人物額公私諸費物額区別調」によれば、この年の金相場は1両につき銀130匁と記載されているので、藩側

(31) 1両＝9貫600文で換算されている。

(32) 前掲「福井藩禄高中諸給人物額公私諸費物額区別調」によれば、1871（明治4）年は記載がないが、その前年、1870（明治3）年については、「金壹両銀三百三拾匁 銭九貫九百文」と記されていて、本文中の銀貨330匁、銭貨10貫文とはほぼ一致する。

の記録は実勢とは大きくかけ離れたものであったと思われる。

先に述べたように、福井藩は、文政期（1818～29年）、天保期（1830～43年）だけでなく、万延（1860年）、文久期（1861～63年）、元治（1864年）、慶応期（1865～67年）と大量の藩札を濫発し続けたようである。したがって、福井金相場（金1両につき銀匁）の上昇、すなわち藩札の減価（藩札価格の下落）は必至であったと考えられる⁽³³⁾。

おわりに

ここでは、近世後期における大阪と比較した場合の、大津と福井の金相場について、本稿で明らかになったところを、簡単に要約しておくこととした。

大津金相場と大阪金相場は、趨勢的にはほぼ同じように動いた。大津金相場／大阪金相場比の動向を見ても、やはり両地金相場の動きは、ほぼバラレルであった。しかし、1780年代は両地の動きは多少異なったものとなっている。また、大津金相場／大阪金相場比に見られるように、大津金相場の水準は大阪のそれに較べてやや高かった。しかし、大津／大阪比は、1850年代になると下降の傾向で、大津に較べ大阪の方が銀安が進んだことになる。

大津金相場の動向は、他の地方金相場に較べると、もっとも三都の金相場の動向に近かったようである。大津金相場の水準は大阪のそれよりも少し高かったが、土佐、徳島、姫路、北摂池田、福井などと較べればそれほど高いわけでもなかった。また、1850年代になると、大津金相場／大阪金相場比は下降の傾向であったが、江戸／大阪比、京都／大阪比の場合も同様であった。

(33) もっとも、他の藩において、もっと大幅な藩札の減価（藩札価格の下落）もあった。たとえば、広島藩においては天保末期に、金1両につきおそらく銀札1,000匁以上といった大幅な減価がみられたようである。前掲岩橋『近世日本物価史の研究』, 226ページ。

近世後期における大津・福井の金相場

このように、大津金相場の動きが三都金相場のそれと似通っていたのは、三都および大津が、いずれも天領（幕府の直轄都市）で、藩札の発行および流通を欠いていたことが主たる要因であると思われる。

変動係数の分析によると、どの時期に変動が激しくどの時期に変動が小さいかといった変動のパターンは、大津と大阪であまり変わらなかったと言える。ただし、1780年代は、大津の方が時間的に先に変動が激しくなるといった傾向が観察された。したがって大津／大阪比の変動係数も1780年代には大きくなっている。これらのことは江戸と大阪の場合にも観察されたが、大津が変動のパターンという点で大阪と似ているのは、江戸と大阪の場合の類似以上であった。この点は大津と大阪が地理的に近かったということが影響していると考えられよう。

また、残差相関の分析によると、大津と大阪の金相場には強い正の相関が観察される。すなわち1760年代、70年代で0.8以上、19世紀に入ると、0.8～0.9、10年代は0.9～1.0という大きな相関係数となっている。このような大津金相場と大阪金相場との大きな相関には、大津および大阪がいずれも天領（幕府の直轄都市）で、藩札の発行および流通を欠いていたということが、大きく影響したと思われる。しかし、1780年代と90年代は正の相関がくずれて無相関あるいは逆相関の傾向さえ観察された（この点は、江戸と大阪の場合にも観察された）。

観察の対象とした期間について比較可能な系列は、江戸金相場と大阪金相場の相関であるが、これは大津と大阪に比べると相関の度合いはやや小さかったようである。この点は、大津と大阪の場合に比べて、江戸と大阪の場合は地理的に大きく離れていたということが影響したと思われる。

つぎに、福井金相場についてみると、相当数の欠年があり、観察には慎重を要するものの、おおむね、1840年代以降幕末にいたるまで、福井金相場と大阪金相場は、趨勢的にはほぼ同じように推移したといつてよいであろう。

ところが、福井／大阪比の系列をみると、以下の二つの事実が明らかとなる。一つは、この期を通じて、福井金相場の水準は、大阪金相場のそれに比べてはるかに高かったということである。場合によっては、大阪金相場の2倍以上にもなっていて、これまでに扱った地方の金相場のなかでは、他に例をみない高い水準である。したがって、当然のことながら、福井の金相場は正銀に対するものではなくて、札建てすなわち藩札表示の相場ではなかったかという推測が成り立つ。

もう一つの事実は、福井金相場／大阪金相場の比率が、1850年代をピークとして、以後低下することである。すなわち、福井の銀安金高傾向は、依然として大阪の銀安金高傾向を上回ってはいるものの、1860年代になると急激に大阪の銀安金高傾向が進んだことが観察される。このように、福井金相場／大阪金相場の比率が、1850年代にやや低下、60年代に急速な低下とみることができれば、これは、すでに見た江戸金相場／大阪金相場、京都金相場／大阪金相場、徳島金相場／大阪金相場、および大津金相場／大阪金相場の比率の推移と（比率の水準はともかく）、ほぼ同じような傾向であると言ってよいであろう。

最後に、やはり福井の金相場は札建てすなわち藩札表示の相場であることは、ほぼ間違いがないと思われる。たとえば、福井藩は、早くも1687（貞享4）年、寛文藩札廃止にあたって、小判1両につき札銀100匁の割合で正金と引き替えている。また、藩は1843（天保14）年に紙幣整理を行ない、その結果、それまで金1両＝札銀103匁であった引替相場を、65匁にまで回復することができたとする記録も残されている。

また、先に述べたように、福井藩は、文政期（1818～29年）、天保期（1830～43年）だけでなく、万延（1860年）、文久期（1861～63年）、元治（1864年）、慶応期（1865～67年）と大量の藩札を濫発し続けたようである。したがって、福井金相場（金1両につき銀匁）の上昇、すなわち藩札の減価（藩札価格の

近世後期における大津・福井の金相場

下落)は必至であった。

付表1(その1) 大津金相場の動向

年次	大津金相場(金1両につき銀匁)			大津金相場／大阪金相場			大津金相場と大阪金相場の「5カ年移動相関係数」						
	各年値	5カ年移動平均	5カ年移動変動係数	各年値	5カ年移動平均	5カ年移動変動係数	単相関係数	純相関係数	5カ年移動平均	大津金相場の残差	残相関係数	差相関係数	5カ年移動平均
1755(宝暦5)	59.55			0.99									
1756(6)	61.59			1.00									
57(7)	61.91	61.13	1.50	1.00	1.00	0.54	0.97			0.78			
58(8)	61.29	61.91	1.45	1.00	1.00	0.26	0.98			-0.62			
59(9)	61.30	62.42	2.10	1.00	1.00	0.29	0.99	0.99	-1.12	0.98			
60(10)	63.45	62.42	2.10	1.00	1.00	0.37	0.99	0.99	1.02	0.99			
1761(11)	64.17	62.70	1.83	1.00	1.00	0.37	0.99	0.98	1.47	0.99	0.99		
62(12)	61.90	62.90	1.44	1.00	1.00	0.34	0.98	0.98	-1.00	0.99	0.98		
63(13)	62.68	62.84	1.38	1.00	1.00	0.42	0.97	0.97	-0.16	0.99	0.96		
64(明和1)	62.33	62.74	1.11	1.00	1.00	0.40	0.95	0.96	-0.41	0.95	0.92		
65(2)	63.11	63.08	0.93	1.01	1.00	0.34	0.94	0.95	0.03	0.85	0.89		
1766(3)	63.70	63.32	0.98	1.00	1.00	0.35	0.93	0.95	0.38	0.83	0.86		
67(4)	63.59	63.66	0.56	1.01	1.00	0.40	0.96	0.96	-0.07	0.83	0.85		
68(5)	63.88	64.26	1.62	1.00	1.00	0.42	0.97	0.97	-0.38	0.84	0.88		
69(6)	64.05	65.03	2.64	1.00	1.00	0.49	0.99	0.97	-0.98	0.92	0.91		
70(7)	66.09	66.26	3.72	1.01	1.01	1.28	0.98	0.97	-0.16	0.99	0.94		
1771(8)	67.53	66.55	3.28	1.01	1.01	1.22	0.96	0.98	0.98	0.99	0.97		
72(安永1)	69.73	66.19	4.18	1.03	1.02	0.92	0.98	0.98	3.54	0.98	0.97		
73(2)	65.34	65.21	5.46	1.02	1.02	0.83	0.99	0.97	0.13	0.95	0.91		
74(3)	62.25	63.62	6.31	1.02	1.02	1.00	0.99	0.94	-1.37	0.96	0.87		
75(4)	61.19	61.65	3.77	1.03	1.01	1.14	0.96	0.89	-0.46	0.68	0.85		
1776(5)	59.58	60.86	1.82	1.00	1.01	1.15	0.78	0.89	-1.28	0.79	0.86		
77(6)	59.89	60.75	1.56	1.00	1.01	1.10	0.76	0.87	-0.86	0.87	0.83		
78(7)	61.38	60.61	1.51	1.00	1.00	0.34	0.98	0.85	0.76	0.97	0.86		
79(8)	61.70	60.59	1.57	1.00	1.01	1.57	0.88	0.86	1.11	0.82	0.88		
80(9)	60.54	60.53	1.67	1.00	1.01	1.60	0.86	0.84	0.00	0.86	0.85		
1781(天明1)	59.45	60.33	1.48	1.04	1.01	1.61	0.83	0.71	-0.88	0.87	0.82		
82(2)	59.61	59.92	0.82	0.99	1.01	1.72	0.66	0.73	-0.31	0.74	0.55		
83(3)	60.36	59.66	0.71	1.00	1.00	1.91	0.36	0.69	0.70	0.82	0.37		
84(4)	59.64	58.81	3.50	0.99	0.98	3.02	0.97	0.65	0.83	-0.53	0.17		
85(5)	59.24	58.08	4.01	0.99	0.98	3.26	0.63	0.62	1.15	-0.05	-0.02		
1786(6)	55.20	57.19	3.64	0.93	0.99	3.39	0.63	0.35	-1.99	-0.14	-0.34		
87(7)	55.98	56.42	2.84	1.01	0.99	3.44	0.53	0.34	-0.44	-0.18	-0.26		
88(8)	55.87	55.73	0.55	1.01	0.99	3.46	-0.99	0.40	0.14	-0.81	-0.29		

近世後期における大津・福井の金相場

付表1(その2) 大津金相場の動向

年次	大津金相場(金1両につき銀匁)			大津金相場／大阪金相場			大津金相場と大阪金相場の「5カ年移動相関係数」				
	各年値	5カ年移動平均	5カ年移動変動係数	各年値	5カ年移動平均	5カ年移動変動係数	単相係	純関数	5カ年移動平均	大津相場の残差	差関数
1789(寛政1)	55.82	56.33	1.86	1.00	1.01	0.94	0.90	0.46	-0.51	-0.11	-0.13
90(2)	55.78	56.85	2.49	1.00	1.01	1.03	0.91	0.55	-1.08	-0.20	0.04
1791(3)	58.20	57.81	3.57	1.02	1.00	1.01	0.96	0.94	0.39	0.67	0.32
92(4)	58.59	58.73	3.37	1.00	1.00	1.00	0.96	0.96	-0.14	0.67	0.52
93(5)	60.68	59.71	2.02	1.00	1.00	0.96	0.96	0.97	0.97	0.56	0.75
94(6)	60.41	60.24	1.55	1.00	1.00	0.29	0.99	0.97	0.18	0.92	0.68
95(7)	60.64	60.82	0.67	1.00	1.00	0.21	0.97	0.97	-0.18	0.95	0.72
1796(8)	60.87	61.08	1.05	1.00	1.00	0.30	0.96	0.95	-0.21	0.30	0.65
97(9)	61.49	61.56	1.44	1.00	1.00	0.52	0.98	0.92	-0.07	0.88	0.61
98(10)	61.97	62.11	1.62	1.01	1.01	0.96	0.88	0.86	-0.14	0.20	0.57
99(11)	62.84	62.31	1.23	1.01	1.01	0.93	0.80	0.81	0.53	0.73	0.67
1800(12)	63.37	62.65	1.10	1.03	1.01	0.84	0.67	0.77	0.71	0.75	0.64
1801(享和1)	61.89	62.99	1.09	1.00	1.01	0.91	0.72	0.80	-1.11	0.77	0.79
02(2)	63.21	63.23	1.28	1.00	1.01	0.98	0.81	0.84	-0.01	0.73	0.84
03(3)	63.66	63.49	1.65	1.00	1.00	0.30	1.00	0.90	0.17	0.98	0.83
04(文化1)	64.02	64.27	1.57	1.00	1.00	0.27	0.99	0.95	-0.26	0.96	0.86
05(2)	64.68	64.71	1.40	1.00	1.00	0.36	0.98	0.96	-0.03	0.71	0.87
1806(3)	65.80	65.28	1.48	1.00	1.00	0.42	0.96	0.95	0.52	0.91	0.85
07(4)	65.41	65.49	1.08	0.99	1.00	0.59	0.86	0.94	-0.08	0.79	0.84
08(5)	66.51	65.27	1.67	1.00	1.00	0.57	0.94	0.94	1.24	0.91	0.90
09(6)	65.03	64.95	1.73	1.01	1.00	0.57	0.95	0.93	0.09	0.91	0.89
10(7)	63.58	64.75	1.71	1.00	1.00	0.33	0.98	0.95	-1.18	0.97	0.93
1811(8)	64.21	64.40	0.86	1.00	1.00	0.37	0.90	0.96	-0.19	0.89	0.94
12(9)	64.44	64.35	0.77	1.00	1.00	0.15	0.98	0.97	0.09	0.98	0.96
13(10)	64.72	64.67	0.55	1.00	1.00	0.19	0.99	0.97	0.06	0.95	0.96
14(11)	64.82	64.92	0.61	1.00	1.00	0.13	0.98	0.98	-0.10	0.98	0.98
15(12)	65.15	65.08	0.46	1.00	1.00	0.15	0.96	0.99	0.07	0.99	0.98
1816(13)	65.45	64.80	1.32	1.00	1.00	0.52	1.00	0.99	0.66	0.97	0.98
17(14)	65.24	64.02	3.00	1.00	1.00	0.81	1.00	0.99	1.22	0.99	0.98
18(文政1)	63.33	62.86	4.27	1.01	1.01	0.77	1.00	0.98	0.47	0.99	0.96
19(2)	60.94	61.86	3.85	1.02	1.01	0.95	0.98	0.98	-0.92	0.95	0.96
20(3)	59.32	61.29	2.57	1.01	1.01	0.94	0.94	0.97	-1.97	0.91	0.94
1821(4)	60.49	61.48	3.10	0.99	1.00	0.92	0.97	0.97	-0.99	0.94	0.91
22(5)	62.36	62.11	3.52	1.00	1.00	0.79	0.98	0.96	0.25	0.93	

付表1(その3) 大津金相場の動向

年次	大津金相場(金1両につき銀匁)			大津金相場／大阪金相場			大津金相場と大阪金相場の「5カ年移動相関係数」					
	各年値	5カ年移動平均	5カ年移動変動係数	各年値	5カ年移動平均	5カ年移動変動係数	単相係	純関数	5カ年移動平均	大津金相場の残差	相関係数	5カ年移動平均
1823(文政6)	64.27	63.14	2.71	1.00	1.00	0.64	0.98	0.96	1.13	0.83		
24(7)	64.10	63.94	1.40	1.01	1.00	0.48	0.94		0.17			
25(8)	64.49	64.39	0.32	1.00	1.00	0.42	0.94		0.10			
1826(9)	64.46			1.00								
27(10)	64.63			1.00								
28(11)												
29(12)												
30(天保1)												
1831(2)												
32(3)												
33(4)												
34(5)												
35(6)												
1836(7)												
37(8)												
38(9)												
39(10)												
40(11)	61.87			1.00								
1841(12)	62.20			1.00								
42(13)	63.75	63.38	2.02	1.00	1.00	0.11	1.00		0.36			
43(14)	64.63	63.79	1.51	1.00	1.00	0.08	1.00		0.84			
44(弘化1)	64.47	64.15	0.60	1.00	1.00	0.11	0.99		0.32			
45(2)	63.92	64.19	0.52	1.00	1.00	0.12	0.98		-0.27			
1846(3)	63.96			1.00								
47(4)	63.96			1.00								
48(嘉永1)												
49(2)												
50(3)	61.63			1.00								
1851(4)	62.89			1.00								
52(5)												
53(6)												
54(安政1)	66.86			1.00								
55(2)	68.64			0.99								
1856(3)	70.05	69.53	2.61	1.00	0.99	0.60	0.98		0.51			

近世後期における大津・福井の金相場

付表1(その4) 大津金相場の動向

年次	大津金相場(金1両につき銀匁)			大津金相場／大阪金相場			大津金相場と大阪金相場の「5カ年移動相関係数」						
	各年値	5カ年移動平均	5カ年移動変動係数	各年値	5カ年移動平均	5カ年移動変動係数	単相係	純関数	5カ年移動平均	大津相残差	残相係	差関数	5カ年移動平均
1857(安政4)	70.66	70.69	2.13	1.00	0.99	0.68	0.97						
58(5)	71.46			0.99									
59(6)	72.65			0.98									
60(万延1)													
1861(文久1)													
62(2)													
63(3)													
64(元治1)													
65(慶応1)													
1866(2)													
67(3)													

(出所) 大津金相場は、鶴岡美枝子「近世米穀取引市場としての大津——近江湖東農村商人の相場帳の紹介(二)——」『史料館研究紀要』5号(1972年)に依拠した。なお、原史料は、近江国蒲生郡鏡村の米商人が遺した玉尾家文書(国立史料館蔵)のうち、宝暦～安政年間の「万相場日記」である。大阪金相場は、新保博『近世の物価と経済発展——前工業化社会への数量的接近——』(東洋経済新報社, 1978年), 30～37, 171～176ページ。なお、原資料は『大阪金銀米銭并為替日々相場表』など。

付表2(その1) 大阪金相場と福井金相場の動向

年次	大阪金相場 (金1両につき銀匁)				福井金相場 (金1両につき銀匁)	
	各年値	5カ年 移動平均	金相場 残差	5カ年 移動変 動係数	各年値	福井/ 大阪比
1749(寛延2)						
50(3)	58.72					
1751(宝暦1)	59.49					
52(2)	60.06	59.34	0.72	0.86		
53(3)	59.43	59.63	-0.20	0.82		
54(4)	59.00	60.08	-1.08	1.71		
55(5)	60.19	60.42	-0.23	2.11		
1756(6)	61.70	60.76	0.94	1.92		
57(7)	61.76	61.26	0.50	1.05		
58(8)	61.15	61.92	-0.77	1.47		
59(9)	61.51	62.37	-0.86	2.01		
60(10)	63.49	62.45	1.04	1.94		
1761(11)	63.92	62.73	1.19	1.56		
62(12)	62.20	62.91	-0.71	1.20		
63(13)	62.52	62.76	-0.24	1.08		
64(明和1)	62.40	62.69	-0.29	0.85		
65(2)	62.75	62.87	-0.12	0.75		
1766(3)	63.57	63.12	0.45	0.91		
67(4)	63.10	63.49	-0.39	0.91		
68(5)	63.80	64.07	-0.27	1.52		
69(6)	64.21	64.74	-0.53	2.37		
70(7)	65.65	65.65	0.00	2.54		
1771(8)	66.92	65.75	1.17	2.33		
72(安永1)	67.65	65.16	2.49	3.88		
73(2)	64.33	63.97	0.36	5.42		
74(3)	61.24	62.45	-1.21	5.63		
75(4)	59.69	60.95	-1.26	3.32		
1776(5)	59.33	60.31	-0.98	1.42		
77(6)	60.14	60.37	-0.23	1.56		
78(7)	61.15	60.52	0.63	1.43		
79(8)	61.53	60.13	1.40	2.70		
80(9)	60.43	60.09	0.34	2.71		
1781(天明1)	57.40	59.91	-2.51	2.55		
82(2)	59.93	59.60	0.33	2.09		

近世後期における大津・福井の金相場

付表2(その2) 大阪金相場と福井金相場の動向

年次	大阪金相場 (金1両につき銀匁)				福井金相場 (金1両につき銀匁)	
	各年値	5カ年 移動平均	金相場 残差	5カ年 移動変動係数	各年値	福井/ 大阪比
1783(天明 3)	60.25	59.51	0.74	2.00		
84(4)	59.99	59.91	0.08	0.52		
85(5)	60.00	59.01	0.99	3.46		
1786(6)	59.40	58.02	1.38	4.22		
87(7)	55.40	57.17	-1.77	4.06		
88(8)	55.30	56.36	-1.06	3.05		
89(寛政 1)	55.77	55.88	-0.11	1.21		
90(2)	55.95	56.56	-0.61	2.44		
1791(3)	57.00	57.63	-0.63	3.59		
92(4)	58.76	58.51	0.25	3.44		
93(5)	60.66	59.45	1.21	2.65		
94(6)	60.16	60.19	-0.03	1.38		
95(7)	60.68	60.73	-0.05	0.77		
1796(8)	60.68	60.90	-0.22	0.96		
97(9)	61.46	61.29	0.17	0.99		
98(10)	61.54	61.52	0.02	0.86		
99(11)	62.09	61.70	0.39	0.41		
1800(12)	61.82	61.99	-0.17	0.89		
1801(享和 1)	61.59	62.38	-0.79	1.28		
02(2)	62.90	62.75	0.15	1.64		
03(3)	63.50	63.35	0.15	1.91		
04(文化 1)	63.95	64.19	-0.24	1.77		
05(2)	64.83	64.78	0.05	1.64		
1806(3)	65.79	65.33	0.46	1.41		
07(4)	65.85	65.43	0.42	1.13		
08(5)	66.21	65.18	1.03	1.70		
09(6)	64.48	64.83	-0.35	1.77		
10(7)	63.59	64.53	-0.94	1.55		
1811(8)	64.01	64.24	-0.23	0.70		
12(9)	64.35	64.28	0.07	0.77		
13(10)	64.76	64.62	0.14	0.72		
14(11)	64.71	64.90	-0.19	0.68		
15(12)	65.25	65.11	0.14	0.53		
1816(13)	65.44	64.69	0.75	1.82		

付表2(その3) 大阪金相場と福井金相場の動向

年次	大阪金相場 (金1両につき銀匁)				福井金相場 (金1両につき銀匁)	
	各年値	5カ年 移動平均	金相場 残差	5カ年 移動変 動係数	各年値	福井/ 大阪比
1817(文化14)	65.38	63.74	1.64	3.76		
1818(文政1)	62.65	62.42	0.23	4.94		
1819(2)	60.00	61.51	-1.51	4.24		
1820(3)	58.64	60.93	-2.29	2.78		
1821(4)	60.87	61.23	-0.36	3.50		
1822(5)	62.47	61.91	0.56	3.55		
1823(6)	64.15	63.04	1.11	2.25		
1824(7)	63.40	63.74	-0.34	1.27		
1825(8)	64.32	64.16	0.16	0.71		
1826(9)	64.37	64.25	0.12	0.76		
1827(10)	64.58	64.35	0.23	0.44		
1828(11)	64.58	64.40	0.18	0.47		
1829(12)	63.88	64.04	-0.16	1.35		
1830(天保1)	64.58	63.64	0.94	1.59		
1831(2)	62.60	63.33	-0.73	1.39		
1832(3)	62.54	63.20	-0.66	1.31		
1833(4)	63.05	62.87	0.18	0.46		
1834(5)	63.21	62.65	0.56	1.12		
1835(6)	62.96	62.21	0.75	2.02		
1836(7)	61.47	61.53	-0.06	2.54		
1837(8)	60.34	60.76	-0.42	2.42		
1838(9)	59.67	60.52	-0.85	1.76		
1839(10)	59.37	60.68	-1.31	2.10		
1840(11)	61.76	61.36	0.40	2.99		
1841(12)	62.25	62.35	-0.10	3.25		
1842(13)	63.74	63.38	0.36	2.07	121.35	1.90
1843(14)	64.65	63.80	0.85	1.49	130.00	2.01
1844(弘化1)	64.50	64.16	0.34	0.62		
1845(2)	63.85	64.20	-0.35	0.56		
1846(3)	64.08	64.01	0.07	0.48	110.65	1.73
1847(4)	63.91	63.83	0.08	0.28	117.60	1.84
1848(嘉永1)	63.70	63.38	0.32	1.62	125.00	1.96
1849(2)	63.62	63.12	0.50	1.53	126.00	1.98
1850(3)	61.57	63.00	-1.43	1.39		

近世後期における大津・福井の金相場

付表2(その4) 大阪金相場と福井金相場の動向

年次	大阪金相場 (金1両につき銀匁)				福井金相場 (金1両につき銀匁)	
	各年値	5カ年 移動平均	金相場 残差	5カ年 移動変動係数	各年値	福井/ 大阪比
1851 (嘉永 4)	62.81	63.34	-0.53	2.19		
52 (5)	63.31	64.04	-0.73	3.44	129.00	2.04
53 (6)	65.39	65.62	-0.23	4.21	130.00	1.99
54 (安政 1)	67.12	67.09	0.03	4.23	135.00	2.01
55 (2)	69.49	68.59	0.90	3.31	150.00	2.16
1856 (3)	70.14	70.01	0.13	2.81		
57 (4)	70.83	71.34	-0.51	2.46		
58 (5)	72.49	72.12	0.37	2.19		
59 (6)	73.77	72.58	1.19	1.56	130.00	1.76
60 (万延 1)	73.36	73.86	-0.50	2.66		
1861 (文久 1)	72.45	76.02	-3.57	5.84		
62 (2)	77.23	79.46	-2.23	9.73		
63 (3)	83.27	84.43	-1.16	12.28		
64 (元治 1)	91.00	93.19	-2.19	16.21		
65 (慶応 1)	98.22	105.60	-7.38	21.25	150.00	1.53
1866 (2)	116.21				160.00	1.38
67 (3)	139.31				240.00	1.72

(出所) 大阪金相場は、新保博『近世の物価と経済発展——前工業化社会への数量的接近——』(東洋経済新報社、1978年)、30~37、171~176ページ。なお、原資料は『大阪金銀米銭并為替日々相場表』など。福井金相場は、「福井藩禄高中諸給人物額公私諸費物額区別調」(松平文庫、福井県立図書館蔵)に依拠した。